

シンポジウム「アジアにおける欧米演技メソッドの活用と適応」

■概要

欧米では、スタニスラフスキー・システムやシステムの哲学を基礎としたいくつかの演技法に代表される体系的演技メソッドが数多く確立され、高等教育機関や俳優養成機関で実践されている。日本においても、特に体系的教育カリキュラムが求められている大学等高等教育機関での現代演劇の俳優養成では、そうした欧米型の演技メソッドを採用することが有効と考える。しかしながら、歴史や文化、言葉や習慣など背景の大きく異なる日本においては、単に欧米型メソッドを流用するのではなく、適切に適応していくことが必要とされている。では、具体的にどのように適応していくべきなのだろうか？

日本以外のアジアに目を向けると、自国の伝統芸能や文化を意識しつつ積極的に欧米型演技メソッドを採用した秀逸な俳優養成プログラムを持つ高等教育機関が多数存在する。このシンポジウムでは、そうした教育機関で指導実績のある3名の教授を招聘し、「欧米演技メソッドの活用と具体的適応」に関して発表して頂くことで、日本の高等教育機関における俳優養成のあり方の手掛かりとしていきたい。

平井愛子（京都芸術大学）

■パネリスト

マイケル・アーレイ Michael Earley（シンガポール、ラサール芸術大学 教授）

米国出身。イェール大学、ジュリアード音楽院、ニューヨーク大学で教鞭を執った後、リンカーン舞台芸術学院（LPAC）の教授に就任。2009年から17年までは、英国のローズ・ブラフォード舞台芸術大学（Rose Bruford College of Theatre and Performance）の学長を務めた。英国では、BBC ラジオドラマ演劇部門のチーフ・プロデューサーとして50作を超える作品を演出、放送した。また、*Soliloquy! The Shakespeare Monologue* をはじめとする演技や演劇史関連の著書多数。現ラサール芸術大学舞台芸術学部学部長。

リカルド G. アバッド Ricardo G. Abad（フィリピン、アテネオ・デ・マニラ大学 教授）

アテネオ・デ・マニラ大学社会学／人類学部で教鞭を執る傍ら、同学芸術学部創設に関わる。1984年から2014年まで同学の劇団（Tanghalang Ateneo）芸術監督として130以上の作品を演出。また、学生劇団のみならず Teatro Pilipino、Tanghalang Pilipino of Cultural Center of the Philippines などプロフェッショナルな劇団でも演出家、俳優として活躍。その他、演劇的技法を採用した教育学の推進にも力を注いでいる。現 APB（Asia-Pacific Bond of Theater Schools）会長。

キム・スギ Kim Soogi（韓国、韓国芸術総合学校 教授）

1995年から韓国芸術総合学校・演劇院創立メンバーの一人として演技学科のプログラム設立と編成に携わる。その後、同学演技学科学科長、同学企画部門担当副学長を務め、現在も演技学科教授として教鞭を執っている。同学で演技や演出を指導する傍ら、プロフェッショナルな俳優、演出家として活躍。主な出演作品は、『更地』（韓国語版、太田省吾演出）など。最近の演出作品には、『かもめ』などがある。その他、*Acting through Movement*、*The Present of Future of Acting Education in Korea*、など演劇、演技関連の著書、翻訳書多数。